
彼らの遅すぎる青春

mogittimogimogi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼らの遅すぎる青春

【Nコード】

N7712Y

【作者名】

mogitttimogimogi

【あらすじ】

5人の異能と異常と超能と剛力と常人が青春を取り戻すために青春らしいことをみんなでやろうと色々無茶する予定です。

遊園地にいたりデートしたり霊界にいたりVRMMOやったりVRFPSやったり酒盛りしたり色々やりたいことを詰め込みまくりんぐする予定です。

はがなとかハルヒとかろーどぐらすとかああいうのにSAOとかそういうのとりあえず闇鍋にすっべーみたいな感じですよ。

なまあたたくぬるぬる読んでくれるとうれしいです。
感想ぜひおっしゃってください。

プロローグ的なあれ

彼は両手を挙げて喜ぶ振りをした！この世界！！広大な世界！！見よ！俺の成し遂げた偉業を！そして見る。左を、右を、後ろを！前を！！下を！！360度！雲の上である。俺は雲の上にたっている……！！

がくりと地面に伏せる。体を覆う全ての衣服を脱ぎ捨てて涙を晴らし叫びたい。嗚呼、世界はかくも美しい！！だが、涙は出ない。それだけの水分はもうない。うなだれ顔が赤くなるだけである。服を脱ぐと凍え死ぬ。ここはアルプス山脈。地上4478mのマッターホルン山の頂上である。長かったここまでの旅路を思いだし彼はただただ震えていた。そのまま一分程度、全てをかみしめるように震えていた。

「……もういいだろう」

そういつつ彼は立ち上がると彼を見ていたたった一人の観客の電源をoffにした。

高校卒業記念に上ったアルプス山脈。マッターホルン。なるほど。たしかに美しい。しかし、こんなものか……。

右手でビデオカメラを弄びつつ、それまで彼を包んでいた壮大な景色に一切の感慨も泣く彼は山脈を降りだした。さあ、早く降りないと間に合わない。彼は無線機を取り出して下山の指示をスタッフ達に出した。

彼にとって山は確かにすばらしかった。しかしそれでは得られない物を彼はここに求めてしまった。そうここではない。ならば行かねばならない。『スタート地点』へ。

「二週間以内に日本に戻るぞ。間に合わないから……」

彼は両手をぶらりとたらしめてぼけっと立っていた。両目はどこにも焦点の合っていないようで、しかし全てを見ていた。

砂塵の舞いそうなほど寂れた住宅街。アメリカのどこかかもしれないし、イスラエルなどの昔話に出てくる紛争地帯なのかもしれない。だけど彼にはどうでもいい。少なくとも彼が慣れ親しんだ町ではないどこか。微動だにせず人気のない寂れた住宅街で彼は何かをただただ待っていた。

自分の呼吸の音とそれに併せた衣擦れの音すら彼には騒がしい。タイムアップのカウントが近づく。「おちつけ。相手も焦っている」自分自身を落ち着けるように一人つぶやく。

瞬間、目の端に動きを感じる。

見つけた……！！

腰をひねりながら右手にぶら下げていた自分の物を振り上げ左手で支える。弾は装填済み、セーフティーも外してある。吸い付くようにスコープが対象に照準を合わせる。「スナイパーライフル」遠くの敵を殺すどおぐその程度の知識しか彼にはない。だがそれでいい。扱い方さえ間違わなければほらこの通り。

音が先か赤い花の咲くのが先か、判断に迷うタイミングで対象に花が咲く。恐らくあれで最後の一人。

「you team win」

無機質な勝利メッセージが彼の目の前に広がるが彼はいつもの癖でささつとメッセージを解除する。これで世界三位になったのか……。感慨は薄い。それは少しはうれしいけれど、なんというか、こつこのじゃない……。

「おめでとうケット！！すっげーな！！マジかよ！！しんじられねー！これで世界三位だ！！それで明日なんだけd・・・」

耳に仲間の声が聞こえる。勝った事に興奮をかくせないようだ。

「それじゃ、俺そろそろ落ちるから」

「え・・・」

乱暴にメニューから接続切断を選択。ゲーム終了。今まで高負荷な処理をしていたであろう背後の機械からのファン音が小さくなる。身体リンク切断。ゆっくりと体を起こす。

明日は彼女にとっての一大イベントがある。彼女にとって何よりも大切な生活の始点が明日にはあった。

「明日から・・・」

スポットライトが当たる。彼女を中心に真円にぼっかり浮かんだ光の輪。

彼女の手の届く範囲、きっかりそれに計算された光の輪である。左手をゆっくりと上げる。右手に視線が集まるのがわかる。そしてゆっくりと下ろし胸の上へ。右手でスカートのフリルをつまみゆっくりと腰を曲げる。

「ありがとうございました」

これで彼女の全ての日程は終了した。

会場を割れんばかりの拍手が彼女を包む。これこそが彼女の成功の証だと言っていていいだろう。たかが高校生の小娘一匹。箱は小さい

が世界中を回って一人芝居を行った。彼女は体全てを使って全てを表現した。彼女は彼女であった時もあつたし彼でもあつた。そして彼らでもあつて我々でもあつた。

最期の地はラスベガス。一時寂れたとはいえ息を吹き返し、今では昔のように光きらめくカジノ都市として昔と同じ息吹を感じさせている。

そんな中で彼女は演じた。小さな小さな箱の中で。指を折ればその指先に妖精感じた、息を吐けば草原を感じた、ひとたび声を出せばもう彼女は彼女ではなくなり、一人の老婆が姿を現した。誰一人として身動きができなかつた。瞬きすら惜しい。

『まるで幻術のようだ』『詐欺でも暗示でも魔法でもなんでもいい。もう一度彼女の演技を拝みたい』

彼女の箱は小さい。100名入るか入らないかの小さな箱。だが見た人は皆涙を流して、大枚を叩いて、それを見た。そしてその夢ももう覚めた。

彼女はゆつくりと舞台を降り、拍手に背を向けた。その表情は今までとは別。どんな表情も顔には張り付いていない。その顔はただの……。

彼女はさつと表情を貼り付けてマネージャーに笑顔を向けた。その顔は女子高生のあどけなさそのままである。彼女は急いでいた。今までの全てを取り戻すために、始まりに立たなければいけなかつた。

「さ、日本にかえる なんつたつて来週は……」

しん……と静まりかえつたプレハブ小屋の中でか細い声だけが

響く。数名の人間が一人の女性の指先に視線を集中させている。あたりを覆う圧倒的なプレッシャーは彼女がただならぬ物だと容易に想像できる。たとえどんな異能を身につけていなかったとしても。

「・・・・・・・・ここに・・・・・・・・ここに・・・・・・・・」

彼女が指さす先にはテーブルに広げられた一枚の地図。あたり一体100km四方を切り取った市街地図だ。そこを無造作に指で指していく。周りはざわめき慌てたようにその指が示した地点にピンをさしていく。

「ここに指が・・・・・・・・けど腕はこっちです・・・・・・・・。ここには携帯電話・・・・・・・・いえ、ボイスレコーダー？」

さらに指で指していく。そこへ周りの者がどんどんピンを刺していく。ピンク、黄色、青、白・・・・・・・・。

「えっと・・・・・・・・下水管の地図はありませんか？」

横で数枚の地図を抱えていた者が慌てたように新しい地図を広げる。

「ここに・・・・・・・・頭が引つかかっています。流れが速く・・・・・・・・ちよっと・・・・・・・・これは？埋まってる？」

その後も彼女が指を指す箇所ピンをさす作業が黙々と続けられた。途中そのプレッシャーに耐えられなかった一人が顔を真っ青にして外へ出て行った。他の者も背中が冷や汗でじっとりとしめついている。天井についでる蛍光灯がヴーン・・・・・・・・ヴーン・・・・・・・・と五月蠅い。

と、彼女を覆っていたプレッシャーが一気に霧散した。

「終わりました」

一斉に周りが騒がしくなる。皆プレハブから飛び出して携帯で指示を出すもの、車に乗り込むもの、縁に乗り込むもの、地図を詳しく分析しはじめるもの。まるで時間が一気に短縮されたように錯覚する。

「お疲れ様です。今回も遠くからわざわざご足労いただき……」

「い、いえ！わたしもちょっと……お願いされたので……ちようどよかったというか……」

低姿勢で接する現場の監督らしき人に彼女はおどおどと視線を宙に浮かせている。腰まで流れるように伸びた彼女の白銀の髪がゆらゆらと揺れていた。彼女が変なのはいつもの事だし、あまり追求しても自分の常識がダイナマイトよろしく粉碎されるのが目に見えているので彼は何も聞いていないし見ていない事にした。

「……それで、今後の予定なのですがー」

「あのっ……あ、明日はちよつと用事がありました……」

彼女は思った。私は変だから、違うから。そうやって今までできてきた。だけど、だけど変わらなければいけない。だってこのままだったらあまりにも……そうあまりにも自分は……。だからこそ。

「ちよつとしばらくお休みをいただこうかと思ひまして、もう私が居なくても大丈夫だと思いますし……それで明日は……」

なんとって・・・

「「「「「始業式だから」「」「」

一話 自己紹介をしよう？

世界はここ100年くらいで一気に変化してきた。遺伝子工学の発達、クローン技術の解放、VR技術発明、シックスセンスの確立・
・等々。ちよつと昔では異能や超常現象、未来の技術だと想像の中
でしか考えられなかった物事が一気に俺たちの目の前に『常識』
として現実の物として現れた。

だからといって100年前や200年前と、多分変わらずきつと俺たちの生活自体は変わってないと思う。クローン技術が公の場に解放されたからといってレトロ映画の『ジュラシックパーク』より
しく恐竜が闊歩する遊園地はできなかったし(なんか遺伝子はほとんど完全に残っていないとクローンとしては作り出せないらしいね
あれって)、VR技術ができたからといって、今までPCにかじり
ついてゲームしてた奴らがそれにシフトしてっただけで、特に少子
化問題に拍車をかけるようなこともなかった。シックスセンスなんて
科学者がようやく認めただからといって、遙か昔から幽霊の存在なん
て皆見える人には見えてただろうし見えない人はこれからも見えな
いだろうから「ふーん」って感じだった。

しかしやっぱりそれと同時に弊害というか例外が出てきた。超能、
異常、異能を持った人々の誕生である。昔からそういう人々はいた。
曰く「幽霊が見える」曰く「異常な動体視力を持っている」曰く「
人の考えがわかる」曰く「ワンフレームの小足余裕です」とかとか。
虚実ももちろんあっただろう。しかしあらゆる技術が進歩する中で
明らかに強力なそれらの能力を持った人々が誕生してきた。もちろ
ん世界中の国では、そういうった人達を囲い込もうとする動きが活発
になる。

もちろん俺の住む国日本も例外ではなく、幼少期から成年後まで
一つの都市で囲い込みができるように、広大な敷地を持つ都市を設

立。本土から遠く離れたこの都市で、俺は生活している。

俺の名前は上村^{かみむら}圭^{けい}。黒い髪に若干茶色の筋の入った瞳を持つ生粋の日本人。身長若干低めだが平均値、やや童顔。高校一年生。俺は今自分の通う学園の二期始業式に参加中である。

バスケットコートが8枚ほど収容できるほどに広大な体育館には、小学から大学までの全校生徒がずらりと整列中である。といってもその数自体は500人つてところか。一学年30人いるかいないかといった感じか？ここは異能を収容するこの都市唯一の異能専用の小中高大一貫の学校。現在はその広大な学園のトップ、学園長の挨拶中だ。白髪混じってはいるがまだまだいけいけナイスガイといった風貌に、中々カリスマを感じる。といっても体育館が広すぎるため大きなモニターに映した画面越しにみてるわけだが。

こういう前置きをする「おーいかにもお前つてなんかすげー能力でももってるの？なんかやってよ。」みたいな反応が返ってきてきうだがまったくもって俺は常人である。平凡、ノーマル、平均値、標準。特にこれといった面白みのなにもない人間だ。

「どつしてこうなった・・・」

自分でも思う。場違いすぎる・・・。右隣を見てみる。なんか凄い筋肉むちつと制服からはみ出した人が居る。あ、見られた。

「なんだ？どうかしたか？」

「い、いえ！！何でもありません・・・」

こえーよ。何だよこの人。高校生かよ。昔のカンフー映画に出てきそうな顔してるし・・・。元は丸刈りだったのだろうか。伸び放題の髪を無理矢理整えたようだが、髪がつんつんと暴れ放題になつてはいるが、ギロリと光る切れ目がものぐさというよりワイルドな風貌としての印象を強くしている。凄い筋肉だと認識はできるが

以外と線は細そうである。うーん。制服にあわねえ……。

「お前見たことない気がするな。一学期にいたか？」

「い、いえ……えーっと今日から入学……です……よ？」

やべーよすげーこえーよなんだよこれあと10秒睨まれたら俺ちびるぞ。というかあれかもっと畏まった方がいいの？これ。やべー対応間違えたかな。というかこの人明らかに異能者だよな……おれの学園生活初日にしてバッドエンドじゃないの？

「そうか。俺の名前は志貴崎しきみ 椋もみぢという。よろしく。そこに座っているとと言うことは、同じクラスで授業を受けることになると思う。分からないことがあったら聞いてくれ。手を貸そう」

ぬうつと手が出てくる。……握手でいいのかな？

「え、あ、どうも。上村 圭と言います。ありがとうございます。しきさき、でもみじですか。四季咲きの紅葉とは洒落ていますね」
とりあえず良い人そうであった。志貴崎さんは俺の言葉に少しだけ口角を上げて「おれも気に入っている」とだけ言った。

俺も手を差し出して握手をする。ぎゅうつとかかなりの握力にびっくりする。志貴崎さんの手はごつごつしており、よく見ると傷だらけだった。深く考えないようにしよう。

と、横から制服の袖を引っ張られた。ちよつと騒がしすぎただろうか。謝りながら左に向くとする。

「あー、うるさくてごめんなさい。」

「……いい……。私も初めましていただけ」

見ると小柄な女の子が俺の制服の袖を引っ張っていた。耳が隠れる程度のショートヘア。見ようによっては少年にも取れるが半開き

の唇からは何ともいえない色気を感じる。肌の色は白くちょっと生気がかけているようにも感じる。そして何と言っても特徴的なのはその瞳だ。キラツと光る瞳でも言うのか。見つめると吸い込まれそうな程に真っ黒で、彼女がどこを見ているのか正確に判断できなくなりそうだ。そしてスカートからのぞく細いふとももに一瞬どきっとしてしまう。こういう女の子が夏服でいるとなんとも肌寒そうだなーとか思っちゃうのを俺だけでしょうか？皆さん。

すっとな手を出される。どうやら俺が今日からという話を聞いて挨拶をしてくれたらしい。俺も手を差し出して握手をする。先ほどのゴツイ手とは違い華奢で細い手だ。

「・・・よろしく。私は野谷のの 卯月うづき」

「上村 圭です。よろしくお願ひします」

内心女の子との握手でどきどきしてしまうが必死に冷静を装う。

「・・・」

「・・・」

やばい話つづかぬーよ。どうしようこの状況。しかしこう。本当見つめられると吸い込まれそうな瞳だな。なんとも居心地が悪くなってきた・・・。

「ほう野谷も今日は来ていたのか。直接会うのは入学式以来じゃないか？」

そこで志貴崎さんが口をはさんだ。正直助かった。

「・・・お互いあまり学校・・・来ない、あと、ミキも来てる。」

「ほうほう！山城もか。後で挨拶に行くとするか。」

「……ん」

それに野谷さんも答えるが、何とも違和感がある会話である。入学式以来？今日は二学期の始業式だから単純に三ヶ月から四ヶ月程度はこの学園の高等部に在籍していたはずだ。しかも確か高等部は各学年一クラスずつ。それにさつき志貴崎さんは『そこに座っていると云うことは、同じクラスで授業を受けることになると思う。』
と言っていた事から同じ学年で同じクラスのはずだ（志貴崎さんと同学年というのに改めて驚愕するが考えないことにしよう）。ここは素直に疑問を口に出す事にする。

「どういうことですか？同じクラスで授業を受けてるわけじゃないんですか？」

「あー、俺たち二人は特別でな。いや、えーっと、あと四人ほど特別なやつが高等部にはいるんだが。それでー」

「……私たちは授業を受ける義務が……ない……」

むむっという感じで腕を組んであーとかうーとか言いながら説明しようとする志貴崎さんと端的に答える野谷さん。

「はい？」

話を整理すると、どうやらこの学園の中でも異能中の異能は授業に出る義務自体が無いらしい。異能者の中にはランクのような物があるらしく、それが一定を超えるとあらゆる研究機関や会社から色々な話が来る。そういったところへの協力をするために学園側へ休学届を出して休学し、そういった所へ行くわけだが、なんとこの二人はその休学届すら出さずにそういった所へ行けるらしい。チートか……。

「ちなみに俺は異常者にカテゴライズされていてー」

「い、いえ！また後で聞きます！」

頼んでないのに志貴崎さんが自分の能力の話をし始めようとしたので慌ててやめさせる。これ以上俺の『常識』を壊さないでくれ。

「・・・私も異常者」

「そ、そうですか。それも後で聞きます」

「・・・うん」

野谷さんも負けじ（？）と能力の話をしようとしたのでとりあえず中断させる。しかし二人そろって自分から『異常者』なんて言わないでくれ。知識としてはあるがなんというかサイコさんにしか見えなくなる。野谷さんは自分の話を聞いてもらうのが嬉しいのかうつすらと頬が赤くなっている気がする。なんとなく頭をなでたいかわいさがあるな。小動物系というか。妹がいるとこんな感じなのかなーなんて同級生に失礼な事を考える。

初めのうちはどうなるかと思ったが、なんとなくこの二人とは仲良くできそうな気がする。

そんなやりとりをしながらも始業式は結構進んでいたらしく、進行の指示により端の方からどんどん人が立ち上がり体育館を出て行く。

「んーあと少しここにすわったまんまかなー」

思ったことがをのまま口に出る。自分たちが移動するまでもう少し時間がありそうだった。

「そうですねー」

自分の何気ない一言にいきなり言葉が返ってきたのでびっくりして声のした方に振り向く。そこには銀髪の美しい女の子が立っていた。瞳の色や顔の造形が日本人の特徴をしているから恐らく日本人

なのだろう。しかし銀髪に負けず整った顔立ちをしている。体つきも野谷と同じ制服を着ていることから高校生だと思えるが、にしてはしっかりと出てる所は出ているみたいで大人びて見える。そういえば始業式始まる前にこの席に案内されたとき、この列の一番端に銀髪の人が座っていた気がする。自分の場違いさ加減に気が動転していて気がつかなかった。

びっくりした俺を見て彼女は「ごめんなさいね」と謝った。いたずら成功とでも言った感じで舌を出して。反則過ぎるだろ。

「貴方、今日からこの学園に入学するのよね？教室に案内するように先生から言われたんだけれど」

「ああ、なるほど。よろしくお願ひします上村 圭と言います」

「鬼谷 凧きたに なぎです」

静かに微笑む鬼谷さんにどきまぎしてしまふ。優しそうな雰囲気にかわいらしい物腰。こんなきれいな人とお知り合いになれるなんて俺って幸せ者だなー。ここに放り込みやがった姉には感謝するべきかなーなんて考えていると

「おお、鬼谷も来てたか！」

「……久しぶり」

「あら。野谷さんとはたまに顔を合わせてましたが志貴崎さんは入学式以来ですね」

さっきと似たような会話が繰り返されてる現状に頭の中が真っ白になりそうです。

「あの、志貴崎さん」

ギギギギと体の節々がさび付いたように動かさず。それにこの仮定を『事実』にする確認するのがたまらなく怖い。

「なんだ」

「彼女も『特別』なんですか？」

「そつだ。彼女は超能者でー」

仮定が事実になったと同時にさらに能力の解説も丁寧にしようとした志貴崎さんを必死で止めて、とりあえず俺の精神汚染を食い止めることに成功した。そんなあわわわしている俺を鬼谷さんがじつと見ていた。なんとなく探られているようにも感じる。

「えつと・・・なんででしょうか？」

「いえ、何でもありませんそろそろ移動しませんか？」

「？」

疑問は残るが彼女がなんでもないというのだから何でも無いのだろう。移動を促された俺は席を立ち彼女の後ろについていく。そして当然のように俺たちについてくる志貴崎さんと野谷さん。

「そついえば体育館から自分の教室までどうやって行けば良いのかわらんなあ」

ぼけつとそんなことを言い放つ志貴崎さんに鬼谷さんがため息をつく。いやいやどんだけ学校来てないんだよ志貴崎さん。深く突っ込むといらぬことまでしゃべり出しそうなので突っ込まない。まだ心の準備が・・・。

俺たちの教室がある建物は体育館からいったん外に出て敷地をしばらく先に歩いた先にあった。小、中、高、大の教養棟が4つ、文化棟、技術棟、研究棟、それによく分からない建物と寮がいくつかがこの敷地内にはあるらしい。鬼谷さんの案内で高学棟へ、俺たちは皆一年生なので一階にある教室に入る。ちなみにワンフロアにつき4つほど教室があり、それが三階建になっており学年が上がるこ

とに二階、三階と上がっていくらしい。というわけで1クラスしかない俺たちの学年では一階の残り三つの教室は使わないことになる。現在は倉庫となっているようだ。

「貴方のクラスはここで、席はー」

「・・・私の横」

どうやら野谷さんの隣になるらしい。窓際の一番奥、教卓から一番奥の席に俺は座ることになるらしい。ちなみに鬼谷さんはだいたいの教室の真ん中、志貴崎さんは廊下側の一番前。なんとというか皆『らしい』場所に席があるな。（俺の中のイメージではクラスの真ん中は委員長、窓際隅っこが目立たない子、廊下一番前がやんちゃ坊主といった変な偏見がある）

「そっか。よろしくお願いします」

「・・・よろしく」

野谷さんに改めてよろしくすると、照れてるのかちょっと下を向いてもじもじされると困る。あたまでなでほしい。

にしても、教室自体は馴染みのある普通の教室だ。至る所になんかうつすら傷みたいなのがついてたりするがボクハナニモミテイナイ。とりあえずこれから俺はここで学校生活をするわけだ。まだまだ不安はある（むしろ不安しかない）けれどどうにかこうにかやっていけそうだ。

一話 自己紹介をしよう？

「今日から一緒に勉強することになります。上村 圭です。よろしくお願ひします。」

お辞儀をする。無難にまとまったはずだ。趣味、好きな物、今はまっている物。うむ。無難である。誰も傷つけずこれからの生活に一切の問題も起こさない。すばらしい自己紹介であったと自負する！そもそも俺以外は全て異能の人々だ。きつと魔法が使えたり、忍者よろしく天井上から降りてきたり、夢の中に現れて悪夢を見せたりするに違いない。敵に回すと恐ろしすぎて考えたくも無いからな！

「はいよろしくお願ひしますねー。誰か質問とかあるかなー」

俺たちの担任は黒縁めがねのちょっと疲れたサラリーマンって風貌の人だった。あと始終なんか口調が軽い。

「はい」

ぬつと手が上がる。志貴崎さんだ

「志貴崎さんどうぞー。というか久々だねえきみー僕の名前おぼえてるかなー？」

「上村の能力をまだ聞いていない。差し支えなければ聞きたい」

あー、そうだった。そういえば俺の身の上はまだ誰にも話していないんだっけ。そして先生のスルーされっぷりがかわいそう。

「えっと、俺の能力は無いです。一般人です平凡です平均です。な

「学園が折れる……上村……もしかして上村さんの姉は上村^{かみ}沙紀^{むひさき}さんですか？」

「はい」

間に入った鬼谷さんに俺が答える。鬼谷さんもなんだか余裕がなさそうな顔をしている。そのやりとりをみていた教室中の空気が凍る。『異次元訪問者』『超越者』『潜る者』なんて言葉があちこちから聞こえてくる。うう、姉はなんか色々トラブルをここでまきちらしまくっているらしい。これはもしかしていじめフラグですか？とりあえず俺はこの何とも言いがたい空気を霧散させるために口を開いた。

「えつとあの、姉がなんか色々やってるらしく申し訳ない。けど、あの、俺自体は本当なんの能力も持たないで、まあ自分でも場違いだと思ってるんですが、通えと許可も下りたことだしすでに入学させられちゃったんで、がんばって勉強しようと思います。仲良くしてください。よろしくおねがいます。以上です」

と一方的にまくし立ててお辞儀をして自分の席へ戻った。

「……驚いた」

「ご、ごめん最初に説明しなくて。何か普通の俺がこんな学園に入ってる良いのが緊張してて……」

「……良い」

隣に座った俺に目を見開いていた野谷さんだったが、俺の言葉にふるふる頭を振って許してくれた。よかった。

すると前の席に座っていた女の子が振り向いて話しかけてきた。

「本当驚いたよ。まさか何も能力も持ってないやつがこんなところ

に来るなんてさー」

「す、すいません」

「いーっていーって。私は山城^{やましろ} ミキ^{みき}。よろしくー」

「よ、よろしくおねがいします」

またもや美人さんである。頭の両方で絞ったツインテールがきれいにそよぐ。髪の色は綺麗なブラウン。元気印といったほうがいいのか。整った顔立ちで表情がころころ変わる。しかし何だかそれが不自然にも思える。魅了されるといっつか、彼女以外が目に入らなくなるというか……。そういえば山城 ミキといえばさつき聞いた名前のような。うんボクイヤナヨカンガスルヨー。

「野谷さん。もしかして山城さんって」

「……ん。……『特別』。……ミキは異能者でー」

「うんそっか。ありがとうございます」

野谷さんの説明を一旦区切って現実逃避する。そっかー彼女もかー。ここで知り合った人皆特別かー……。どんな確立だよーもーあーもーふふふー。

そうこうしているうちに先生の説明は進む。とりあえず今日は授業はないらしい。このまま今日は解散となり下校だそうだ。委員とか諸々はまた後日決めるらしい。なんかこの教師すごいいい加減な気がしてきたよ？俺。

「それではー今日はここらへんで終わりですー」

お疲れーといいながら出て行く先生に続き皆席を立ち上がりそれぞれやりたいことをやり始める。俺は今日一日の緊張感から解放されて机にべたつと倒れ込んだ。うう。胃に穴が開きそんな気がしてきた……。さて。俺はどうしようかな。家に帰るか？

「上村ちよつといいか？」

「え？あ、志貴崎さん。はい」

顔を上げると志貴崎さんが立っていた。こつちが座ってて向こうが立っているこの状況だと志貴崎さんの威圧感がやばい。おっかなびっくりしている俺の様子に疑問符を浮かべる志貴崎さんであったが、どうやらお昼に誘いたいらしい。この学校の事もよく分からないだろうし、俺自身の事にも興味があるらしい。基本良い人なんだなと再認識してその誘いに乗ることにした。その話を聞いていた山城さんと鬼谷さんと野谷さんもついてくる事に。

そんな訳で食堂がある建物に向かっていているわけだが、高学棟から出たとたん何か凄い視線が俺、というより俺たちに向けられている。正直もう耐えられません。

「なんでこんなに注目されているんでしょうか」

「そりゃー私たちってあんま学校に来ないし。それぞれ結構有名な人だしねー。それにーあんたの噂ももう広まってるんじゃないのー？」

「ええ！？無能力っただけで噂に！？そりゃ珍しいでしょうけれど学園の外に出れば僕みたいな人なんてたくさんいますよねっ」

「いえ、上村さんの場合お姉さんがあの方なので・・・」

「ああー・・・」

にやにやつと俺を物色するような目で見てくる山城さんに変わり、鬼谷さんが説明してくれる。どうやら姉はこの学園のピラミット頂点に君臨しており、その破天荒な性格も災いして色々騒ぎを引き

起こしていたらしい。それが一学期の終盤近くいきなり沈静化、というより彼女自体が学園から姿を消したらしい。まあその理由も多分俺は知ってるわけだが。

そしてこの四人の組み合わせはかなり凄いことらしい。まあ入学式以降あつてないとか教室までの道覚えてないとか平気で言い出すような人物達が四人集まっているわけだからそりゃそうか。というか転校初っぱなから凄い注目を浴びてるのってやばくない？やばいよね？俺っでもうっp^

四人で食堂に入る。全校生徒が使うとのこと、建物一つまるまる食堂らしい。すごく広い。とりあえず食券を買う。うーん何か今日は疲れたし、おなかもあまり空いていないので無難な感じでサンドウィッチセツトで。他の四人もそれぞれ食券を買い、料理ののったお盆を受け取って席に着く。ふむー。それぞれなんとも特徴が出ている。野谷さんはスパゲティ、山城さんは俺と同じサンドウィッチセツト、鬼谷さんは和食セツト、そして志貴崎さんはなんとステーキである。まあその体だとそれくらい食べないと体が持たないのだろうが。

と、そのままスパゲティを食べようとすると矢野さんにハンカチを差し出す。

「……え？」

ハンカチの意味がわからないらしい。

「えーっと必要ないかもしれないけれど襟にかけてください。ソース飛んじやったりすると悲惨だ……ですから」

「……あ、ありがとう」

野谷さんは素直に俺のハンカチを受け取って自分の制服の襟に引っかけ、小さくスパゲティを丸めてゆっくりと食べ出した。黙々食

べてる姿がなんとも小動物的である。なでぐりたい。

「紳士じゃーん。見直しちゃうよー」

「いやいや初対面ですから。見直す元ないですから」

軽く冷やかしてくる山城さんに突っ込む。

「……ふえふにおへたちまじまじまじまじにそんなふあふおとふかいしふあふていい」
「口の中の物を食べきってからしゃべってください」

リスかこの人は。ステーキ口いっぱい頬張りながらしゃべられても恐怖感しか相手に与えないぞ。

「……んむ。別に俺らにそんな口をきかなくても良い。さっき言い直したって事は普段はそんな言葉遣いじゃないんだろっ」

「そーねー」

「そうですね」

「……ん」

「はぁ……そうで……そうか」

皆普通の言葉遣いでしゃべってもらいたいようなので普段通りのしゃべり方に戻す事にする。この人達変なオーラ出してるからつい言葉が丁寧語になっちゃうんだよなー。がんばって普段通りを心がけよう。しばらくは無言で食べる。普通のサンドウィッチだと思っただが、挟まっている素材に気を遣っているらしい。レタスとキャベツを両方使ったりして歯ごたえや味に変化があって面白い風味がある。チキンも挽き立ての胡椒が使われているらしく風味が良い。

「へえ。美味しいな」

「ふおうふあら」

「いけるよねー」

「……ん。おいしい」

「そうですねー」

サンドウィッチセットだといつても結構なボリュームがあったが飽きない味付けも手伝って軽く完食できた。あと志貴崎さんが食べながらしゃべるのは聞かなかったことにした。

「それで、上村。どうしてお前がここにくる事になったのか、詳しく聞きたいんだが」

ステーキを食べ終わった志貴崎さんが口を開いた。しかし食べるのが早いあなた。野谷さんまだ食べ終わってないぞ。黙々食べる姿が小動物的で下略。「もちろん喋りたくなければ喋らないで良い」と志貴崎さんが言ってくれたが、別に俺として隠すような事は一切無いので説明することにした。

「別に詳しくも何も、6月くらいに姉が突然俺の部屋に来て開口一番『圭、お前も私と同じ学校に行くのよー!!』って叫んだと思ったら、外に飛び出していつて、まあ意味もよく分からなかったし、そのまま放つといたら夏休み中に学園案内の分厚い郵便物が来て。元の学校からも転学扱いになってるし仕方なくここに」

「相変わらず自由すぎるな。お前の姉は」

志貴崎さんは口を大きくへへの字に曲げて変な顔になる。

「それでー？その圭のお姉ちゃんはどこいったのさー」

デザートは杏仁豆腐を幸せそうに食べながら山城さんが聞いてきた。この人はいちいち仕草がかわいすぎて困る。もっと見ていたい

気持ちになぜかなるのを必死に押さえて山城さんから視線を外す。

「俺も良くわかんねえ。というか『同じ学校に行くのよ宣言』からすぐどこか行っちゃまった。てっきり学園で何かやってるのかとか思ってたんだがそうではないんだよな。・・・山城さん達の話の聞くとき」

どうしても『圭』と下の名前を言われた手前、俺も『ミキ』と返したかったがこっぴどくかしくてできなかった。俺のばかばか。ちなみに山城さんにはバレてるみたいですよっごいニヤニヤしてる。・・・くそ・・・。

「ふふん。うんそーだよ。といつても私はあんまりガツコこなかったから『圭』のお姉ちゃん是我的居ない合間にきてたかもしれないけどー。皆は？」

「やっぱばれてやがる。」

「見てないな」

「・・・ない」

「みてないですね」

「そっかー。まあ置き手紙に「魔王を倒してくるからちよつと異世界いつてくるね ミ(右下に大きく猫の顔)」ってのはあったんだが。まあいつもの冗談だと思っし」

俺の言葉に志貴崎さんが変な顔をさらに変にして、鬼谷さんがお茶を吹き出し、野谷さんが固まり、山城さんが杏仁豆腐が気管に入ったらしく咳き込んだ。なんとも大惨事です。

「ちよ！何その反応！！いや、きつと冗談だって。地球の裏側とかで楽しくやってるだけだって！」

「それもどうかと思うが・・・」

「……そうだと良い」

「まー、あの人ならどこにでもいけちゃいそうな気がしてきて……」

「さ、さすがにないですね」

姉はどんな生活をここで繰り広げていたのだろうか。胃に続き、頭も痛くなってきた。

一話 自己紹介をしよう？

「そういえば上村の話ばかり聞いていたな。俺たちの能力の話もしないとだめだろう」

ステーキ食べて元気いっぱい！って感じで張り切ったオーラを出して志貴崎さんが立ち上がる。

「そういえばそうでしたね」

「あーそうねー」

「・・・そう」

「ちよちよちよちよと待って！気持ちの準備をする」

今すぐにも何かやりそうな志貴崎さんを慌てて止める。何なんだろうこの即行動しちゃう人。と、俺のこの行動を疑問に思ったのか鬼谷さんが口を開いた。

「あのお姉さんを持ちながら気持ちの準備・・・？」

「確かにそだね。なんでなんでー？」

「いやー。あの、俺はノーマルな一般ピープルなわけで、姉の行動をなんというか・・・奇行として認識してどうにか自分を守ってきたというか、目を背けてきたというか」

思えば自分の『常識』を守るために日々必死だった。姉の行動は奇行という以外の何物でも無かった。今まで何も持っていなかったのに次の瞬間何かを手にとってるなんてざらで（必死で俺は今まで気を失ってたんだなって自分を騙した）、車に乗ってたら2時間の道のりを一瞬で目的地に到着してたり（必死で俺は今まで気を失ってたんだなって自分を騙した）、朝家を出て行った姉が昼には地球

の反対側から電話をかけてきたりした（必死で俺は以下略）。その苦労もこの学園に入ったことにより全てが無駄である。ぐっばい俺の常識。俺の日常。

「はー圭も大変だねえ。けどまあこの学園に転入した以上もう目を反らす事もできなくなったわけだ」

「・・・うん・・・ぐす」

「よしよし」

やばい泣けてきた。まあしかし頭なでるのは止めてもらいたい。もっとやってほしくなるから。

「もういいか？」

「あ、ごめん。うん。いいよ」

志貴崎さんは構えの状態ですつと待ってたらしい。俺の言葉を聞くと軽くとんつと音を立ててジャンプした。3mくらい。

「え！？ええ！？すげー！！」

「おー飛ぶ飛ぶ」

「あー」

「・・・すごい」

やんやんやはやし立てる俺たちの前に、降りて（落ちて）来た志貴崎さんは得意げにふふんつと鼻を鳴らし得意げだ。しかしその風体にそのジャンプ力。まさに野生児ですね。アマゾン！とか叫びそうですね。

「俺は体のリミッターが無い異常者だ。通り名として【剛力】とか言われるが、それは俺の一端に過ぎない」

人間の体は常にある程度のリミッターにより筋肉の動きを制限している。そうしなければ骨や筋肉。つまり自分の体自信を無理な動きによって破損させてしまうからだ。古来より日本には「火事場の馬鹿力」という言葉があり、この言葉は火事場ヒンチに直面した人は、今までの自身の筋力からは想像もつかないほどの力が出る。という意味だ。そのリミッターが志貴崎さんにはない。志貴崎さんは自分の意思で自由自在に筋肉の全ての力をコントロールできる異常者なのだ。もちろんデメリットはあり、筋力を意識的に制限しないと物も壊してしまうため持つことすらできないそうだ。それって何って『スーーマン』？もはや誰も名前すら知らないレトロヒーロー映画の、古典的ワンシーンが俺の脳裏で展開された。

「さらに筋肉も常人のそれと違い、柔軟性と弾力性に富んでる・・・らしい」

恐らく彼を研究している人の受け折りなのだろう。あと筋肉うねうねさせるな。自由に操られるのは分かったから。

「・・・次は、・・・私」

志貴崎さんに続いて野谷さんも能力を見せてくれるらしい。立ち上がって俺に背を向ける。首を横に回してるから、俺の位置は野谷さんの見ている方向からして大体100度程度の位置だろうか。

「・・・この位置から・・・普通は圭を私はちゃんと見えないと・・・思っ」

「俺なら誰か居るな」程度しかわからないだろうな」

自分に置き換えて想像してみる。人間の視野は顔の中心から大体

150度程度。そのうちはつきりと見える角度は90度程度である。これは肉食動物の特徴で、草食動物の場合は目の位置が横についていることから270度程度カバーできると言われている。今の俺と野谷さんの位置関係では、人か物かすらはつきりと判断できないほど見えづらはずだ。

「・・・指を・・・立ててみて。・・・当てる」
なるほど。とりあえず四本立ててみる

「・・・四本」

「すごいな！」

「へー」

「そんなことができるんですねー」

「おお！」

野谷さんは志貴崎さんの時と同じくはやし立てられてちょっと下を向いて照れている。

「・・・私は脳のリミッターが外れてる・・・異常者」

人間の脳みそはあらゆる処理を請け負っている。見た物を記憶したり、判別したり、体を動かしたりその他諸々だ。しかしそれらを全て処理しようとするとなら脳の処理が追いつかない。よって受け取った信号をばいばい捨てる処理が間に合うようなのだが、そのリミッターが彼女は外れており、全ての処理をしようとするらしい。そしてその対象が目からくる視覚情報となっているようだ。ちなみに志貴崎さんも正確には脳のリミッターが外れた異常者、らしい。二人とも脳のリミッターという点では同じだが、その種類が違うようだ。また、彼女は通り名で【鷹の目】と言われているようだ。きっとそいつ軍事オタクだと思う。彼女の目は何者をも見逃さない。動いた

ものは全て彼女の目に入り脳が認識する。また、かなり遠くの物も自在に読み取り認識する能力を持っているようだ。もちろんデメリットはある。

「……脳の処理が間に合わなくて、……あんまり早く動けない」

あまりの情報量の多さに、彼女の脳がうまく処理できずに急な運動ができないのだそうだ。彼女のゆっくりとしたしゃべり方もそのせいらしい。まあ「……意識すれば……脳のリミッターも……付けれる」というからわざと外したまんまなのだろう。チートめ。

「それじゃあ次は私ですね」

野谷さんの説明が終わった所で鬼谷さんが立ち上がった。とたんに周辺になんともいえないプレッシャーが立ちこめる。パリッと静電気に毛が逆立つような感覚がする。

「なんかパリパリするー」

ひゃんつと山城さんが震えて両肩を抱く。

そのまま二十秒ほどした所でふつとプレッシャーが無くなるのを感じた。今のが彼女の能力なのだろうか。何か今までのより全然毛色の違う能力なのが想像できる。

「これからこの食堂に女の子が二人きます。多分小学棟の生徒で一人は帽子をかぶっています」

そう言い終わらないうちに食堂の入り口が開いて女の子が二人入ってくる。一人は帽子をかぶっている。

「おおっ」

「どうやって知ったのだろうか。彼女が動いていなかったのは俺を含めて皆で見えていたし。」

「一人が販売機で食券を買います。気分的にはおにぎりランチ」

「その言葉に従うように、鬼谷さんの言葉の後に続いて帽子をかぶった女の子が販売機の前へ。」

「けど、金銭的には好物のハンバーガーランチも買えます。今日の私はちよっとだけリッチ。さあどうしよう」

「うーんうーんと悩む女の子。」

「と、そこでもう一人の子がサイフを忘れてしまっています」

「帽子の女の子の後ろで鞆をさぐっていたもう一人女の子が「あ！おサイフない！」とちよっと大きな声を出す。」

「それを見た彼女は黙っておにぎりランチの食券を二枚買います」

「帽子の女の子が食券を二枚買っているのが手の動きでわかる。その食券をもう一人の女の子に渡す。受け取ったもう一人の子がびっくりして「ごめんね」と謝っているようだ。」

「二人そろってちよっと遅めの昼食です。よかったよかった」

「……すげー……」

「ほー……」

「……すい」

「……」(無言で手を叩く)

皆あんぐり口を開けて感心しきりである。何かすさまじい物を見せられてしまった。志貴崎さんなんてもう言葉すら出ないようて手を叩くしかできないようだった。

「というわけで、私は電磁波を操る超能者です」

人は電気で動いている。もちろん脳も。人は常に電気で考え電気で動き電気で感じている。それらの情報は常に体のあちこちから『電磁波』として発散されており、彼女はそれを『感じる事ができる』。人は彼女を【感じる者】と評する。彼女は自分から積極的に働きかけることにより、周囲の電磁波を発する物を『感じ』その存在を追跡する事ができる。つまり対人ソナーである。(ここで山城さんが『感じるだなんてえっち』と茶々を入れた。鬼谷さんも「敏感すぎて困ります」と飄々と返しちゃうあたりこの二人に俺はあらゆる意味で勝てそうに無いなと思つた)と、同時にある程度の距離に近づけば程度はあるが考えを『感じる』事ができる。

「もちろんプライバシーですし、皆さんの頭の中をのぞいたり絶対にはしませんよ」と彼女は言ってくれた。まあ俺が彼女の能力を知ったところで防ぐ手立てはないのだし信じるしかないだろう。他の皆も同様の考えのようだ。そして「見たくないものもみえちゃいますしね」と彼女は寂しそうに笑った。つまりはそれがデメリットなのだろう。

「じゃあ最後は私……!」

最後の太鼓といたところで元気いっぱい山城さんが立ち上が

った。

「権立ってー」

「む」

山城さんの指示により志貴崎さんが立たされる。

「権は私の目を見て。皆は私の顔みちゃだめだからね」
「うむ」

何が起ころのであるうか。ここまで来ると次はどんなとんでも能力が飛び出してくるのか、わくわくしてくる物である。

数分後、そこには信じられない光景が広がっていた。

両手を腰に添え、ふんぞり返りながら壮大に志貴崎さんを見下ろす山城さん。志貴崎さんはその前に跪いてる。

「まだまだ頭が高い！！ひれ伏せ！！」

「ははー！！！！」

「お前の名前なんだ！」

「豚でございます！！貴方様の前に跪くこの私めは言葉を喋る事すら身に余るただの豚でございますー！！」

「ああん？じゃあ人様の言葉なんて喋るんじゃないよー！」

「ぶひー！！！！」

「お前の名前はなんだー！！」

「ぶーぶひぶひー!!」

「豚語はわからんわー!!」

「ぶひー!!」(涙声)

なんだろうこれ。すさまじい光景である。すでに志貴崎さんは動きを通り越して地面へはばっているし……。とうかこれ腕変な方向に曲がってない？

「ちょ！そこらへんでやめたほうがっ！」

「そ、そうですよ！」

「……だめ」

顔を見るなど注意を受けていたため、必死に顔を下に向けて顔が合わないようにしながら止めに入る。

「う、ごめんねー！私も変なスイッチはいつちやってさー」

「いや、問題ない。しかし凄いな。頭にもやがかかっているように体が言うことを聞かなかつた。一体俺は何をしていた？」

どうにかなだめて我に返った山城さんは『てへぺろ(・<』
といった感じであんまり反省しているようには見えない。志貴崎さんは腕がすごい変な曲がり方をしていたが、軽いねんざで済むそう
だ。自分だったら……。と思って小便ちびりたくなつた……。チ
ビツテナイヨ？あと志貴崎さんの名誉のために、先ほどの光景は志
貴崎さんには内緒とアイコンタクトで了解し合つた。

「ってーわけで私は幻術の異能者なのさ」

へへんって胸を張る山城さん。うぐ、へそがちらつと見えた。

こちらへんで彼らの解説をしよう。俺は今まで単純に彼らを『異能』と呼んでいたが、『人でありながら人を超えた者』として、世界は彼らをいくつかにジャンル分けした。

『異常者』：何らかの身体的能力が突出して体現したものの。

彼らは人間以上の嗅覚を持ったり、人間以上の筋力を持ったり、人間以上の聴覚を持ったりした。志貴崎さんと野谷さんは典型的な異常者だ。

『超能者』：その名の通り昔は超能力と考えられていたもの。

シックスセンス、透視、未来予知。それらを使える者達の総称。彼らは遠くの物事を感知し、時間すらも超えて今の世に来世を呼び寄せる。これは鬼谷さん。

『異能者』：上記二つに当てはまらない者達。

彼らは縛られない。まさに人ではない『ナニカ』を彼らはその体に体現する存在。

彼女、山城 ミキの能力は幻術。昔から宗教団体の教祖達が持っていたとされる異能である。カリスマと呼ぶ声もある。だが彼女ほど明確にその効力を示せる人間はいない。

彼女には種もシカケも必要ない。唯一必要なのはその体。そして相手にある程度の知能があること。彼女はただ貼り付けるだけではない。それだけで人間、鳥、魚、動物。ありとあらゆる生命が彼女に跪く。まさに異能。現代の科学が到達できない地点が彼女一人の中に。彼女の演技を見た者達は涙を流しながら『愛されない恋人』と彼女に二つ名をつけた。彼女の演技を皆が愛した。しかし彼女自身

は誰からも愛されない。彼女の本質は誰にもわからない。永遠に。だから彼女は『恋人』であるが『愛されない』。寂しい二つ名が、彼女には付いた。今も彼女は演じている。彼女は演じる事を止める事はできない。今も一人の女子高生を……。だからこそ俺は彼女に合ったときから惹かれていた。目が離せなかった。

「風と同じで、私もむやみにこの能力使わないから安心していいよん。まあどうやっても今みたいに微量に出るのはしかたないんだけどねー」

たはーつとすまなそうに山城さんが謝る。わざわざ自分から使わないと宣言してくれる。その心遣いがあったかった。

「皆すごいなあー」

「それで済ますお前もおまえだな」

「すごすぎてもう頭パンクしてるだけだよ」

もう驚かされっぱなしで何がなにやら頭がパニック状態である。完全に理解の範囲外だ。そんな彼らが学園を相手取って『楽しそうだから私の弟も学園に入れる』という理由で交渉した姉には劣るといふのだから、姉は一体なものだろうか。15年一緒に暮らしてきて今更ながら、俺の姉の自由さにあきれるばかりである。

「しかし皆それぞれお互いの能力知らなかったのか？いくらお互い顔合わせなくてもお互いを知る機会くらいありそうなものだけど」
「『色々とあったから』」

異口同音に同じ事言われた。多分本当に色々あったんだろうな。常人には理解できない範疇で彼らは生きてる。

「皆でこうやって、顔を合わせて落ち着いて話す機会は初めてだ」

「そだねー」

「上村さんのおかげですね」

「……おかげ」

俺のおかげだといわれて、思わず頭をぼりぼりとかいた。夏休み中ずっと不安だった。この学園で俺はどうなってしまうのか。俺と彼らはあまりにも違いすぎると思っていた。いや、実際違っていた。しかしもう不安感はない。やっていけそうだと考えた。しかし同時に彼らが今までまともに顔を合わせていない事も思い出す。彼らが明日からはまた学園にこない事も十分にあり得るのだ。せつかく知り合えたんだ。この縁は絶対に切りたくないな、と、彼らにあって数時間の短い間で思えるようになった。

「な、なあ。皆はなんで始業式に参加したんだ？本当は来なくてもよかつたんだろ。あ、明日から学園来なくなるのか？」

若干不安もあつたが、明日から会えなくなるのは正直さみしい。まあたまには会えるんだろっけねど。

「ふむ。その事なんだが、ちょっと皆に相談がある」

志貴崎さんが俺の言葉に反応して少し考えた後、ずいっと顔を出してそんなことを言ってきた。うーん何か天性の巻き込まれ癖のある俺の嫌な予感がびんびんですよ。

二話 友好を深めよう？

「思い出作りをしたい」

志貴崎さんの話はこうだ。今まで彼はやりたいことをやってきた。色んな場所へ行き色んな場所へ上った。先月はヒマラヤ山脈にも行ってみた。しかし満たされることはなかった。そこで彼は気づく。

仲間が居ない事に、友が居ない事に。異常者である自分に誰も追いつけない。肩を並べられない。もちろん今まで行った場所に行かなかった人々はいたが、彼らはスタッフであり仲間ではない。その場を離れるともう連絡すらない間柄だ。彼らの目はどこまで行っても『人ならざる者』を見る目であった。友好関係など結べるはずもなく、どんな広大な景色もカメラに写ったひとりぼっちの自分と並べるとなんとなく見えた。

「俺の何と薄っぺらい事か！」

彼は山に吠えた。今までしてきたこと全てが薄っぺらく感じた。隣でこの景色を見る相手が欲しかった。「やったな！俺たち！！」と笑い合える漫画みたいなやりとりをする相手が。それは友でもいいし仲間でもいいし恋人でもいい。彼にはそれらの関係の違いが良く分からなかったが、それでも隣で笑ってくれる存在が欲しかった。

「次はどの山を登ろうか」

「嫌だよお前となんて。もう二度とのぼりたくねー」

と冗談を言い合う仲間がただ欲しかった。それが彼が始業式に参加した理由であった。高校デビューではなく始業式デビューというわけである。同じ異能を持つ者達とならばそういった関係を持てる

と思った。そして相手が自分に追いつけないのならば、自分は歩みを緩めようと、そう思った。

「え、俺ヒマラヤなんてのぼりたくねー」

「私も遠慮します」

「私もー」

「・・・私も」

それぞれが似たような反応をする。志貴崎さんはそれを見てがくつと崩れた。

絶対に嫌だこんな筋肉と山とか上るの。ありえねー。というか途中で死ぬ。

「いや、別に一緒に山を登ろうとってる訳じゃ無い。一緒にになにかやる友が欲しいんだ」

実際今日一日の俺たちとのやりとりは彼にとっても楽しかったらしく、こういう事を色々とやっていきたいらしい。といってもお互いの身の上や能力話し合っただけだよな。それで楽しかったってどんだけな人生歩んできたんだこの人・・・。

「・・・私も」

「実は私も・・・」

「私も・・・」

いや、皆そうだったようです。

野谷さんも志貴崎さんと同じように今まで色々やってきたが友達ができず、VRFPSが好きでプレイしているとそういった人達とある程度知り合えたが、そこはやはりゲームの世界。勝敗に執着するようになりお互いのミスを責め合ったりギスギス。昨日は大会の途

中なのに口げんかを始めたチームメイト達に嫌気がさし、今日が始業式だと言うこともあり一念発起し、ゲームを放棄して参加してきたらしい。大会を放棄て……。

鬼谷さんは、普段その能力から警察関係に依頼されてあちこち飛ぶのが日常で、そこは常に鬱々として血の臭いが後を引く場合が多かったらしい。嫌な物もたくさん見てきたし、その分お金も動いたが、彼女はその現状に遂に耐えられなかった。この気持ちを打ち明ける同年代の友達が彼女には居なかった。

山城さんに至っては、世界各地で芝居をやるうとしたものの、演目の共演者達が漏れなく彼女の幻術に掛かり芝居そのものが成り立たない物に。仕方が無いので小さな劇場を回り一人芝居をしてきたらしい。スポットライト一つ自分に当ててそこから一步も動かずに理由は「照明係が幻術で使い物にならないから」だそうだ。彼女は幻術など無くても一流の演技ができると自負していた。それでやっていけると。彼女は幻術を制御しようと努めた。自分の物であるはずのこの能力は制御可能な物であると信じた。しかしそんな彼女と幻術は切り離される事なく世界を渡った。あげく『愛されない恋人』など不名誉極まりない二つ名すらいたたく事に。結果彼女のプライドは打ち砕かれ傷心。あとは他の人と同じである。

それぞれの話を聞くと、うーむ確かに異能者達は色々であるようだ。特に山城さんはなんだか踏んだり蹴ったりである。その背中に哀愁を背負っているように感じる。

「頭なでなでもいいよ？」

と言われたが遠慮しておいた。・・・俺のばか。

何となく皆落ち込んだ空気をかもしだしている。お互いの身の上

を聞いて自分に重ねたりして落ち込んでいるようだ。まあしかし、皆友達をほしがっているようだし、転入してきたての俺も友達がない。なら話は一つしか無いだろう。

「よし！話はわかった。それで？何するの？」

「む。乗ってくれるか！」

「登山は無しな。俺体力ないし」

「もちろんだ！」

分かってるのかこの人は。子供のようにはしゃぎ方をしやがる。

「とはいったものの、これといって計画は無いな」

ないのか。

「用は遊べばいいんでしょ？海いこーよ海」

楽しそうに山城さんのツインテールが揺れる。山城さんは自分に正直だなあ。しかし速攻で海が出てくるのはどうだろう？「あら、いいですね」なんて鬼谷さんも同調し始めるし。いや、お二人の水着姿は是非見てみたいですがっ！「……指定の水着しかない」と野谷さんがつぶやいた。スク水……だと！？

「まあ待って待て。まずは目標を立てようぜ？そうしないと方向定まらなくてふらふらするだろ？立てなくてもいいのかもしれないけれど」

「……思いで作り？」

野谷さんが小首をかしげる。

「なんか漠然としすぎてるな」

そこでさっきまではしゃいでいた志貴崎さんがガバツと立ち上がり叫んだ。

「青春だー！」

「くくくえええー……くくく」

どん引きである。何でも彼は男臭いのか。いや男だが。なんとも漢すぎる。

「俺らは今まで何をしてきた。小、中と進んできて高校まで年を重ねた。その歳月で何を得た？何を努力した？何を楽しんだ？少なくとも俺は無い。何も。自分の能力を掲げて『自分ができること』をただシナリオ通りに選んで来ただけだ。俺らは今までこぼしてきた青春を取り戻さないといけない！」

「くくくええええー……くくく」

どん引きだ。力説し雄々しく拳を固める志貴崎さんには悪いがどん引きである。

「まー青春は置いて、確かになんとなく自分の能力中心で過ごしてきたなー私もー」

「私もそうです」

「……私も」

志貴崎さんも含めてあまりにも常人から離れると似たような人生を歩むことになるようだ。何となく皆の目標とどうか方針が心の中

で決まって来たみたいを感じる。

「ま、とりあえず目標は『青春(仮)』ってことで。」
「なんだ(仮)って」

志貴崎さんは不満そうに口をへのじに曲げた。まあ『思いで作り』とあまり変わったような感じはしないが。とりあえず話が進まない気がするしこれで良いだろうと納得する。

「さてさてー。じゃあ何するかだよねー」

「そっだなー」

皆でうーんと考える。目標は立てた物の『青春』って何さ。なんて哲学的な思考に頭が偏ってる気がする。時刻は二時。大体の生徒は既に学園を出て都市に繰り出しているようだ。他の先輩後輩達も今日は午前中のみ授業だったらしく、食堂で昼食を食べる者はほとんどみとめられなかった。というか何で俺らは真面目にこんな事考えてるんだ？

「何かあれだな。『遊ぶために計画を立てる』なんてバカらしいな。俺らは真面目すぎた気がする。とりあえず長期的な計画は後にして、ここは無計画に街に繰り出すってのは？」

変に海とかキャンプとかそういう事はかり考えてるからまるで遊ぶことが難しいように思えてくる。ここは普通に外で皆で遊びにくいのが正解なような気がした。

「なるほどー」

「・・・それがいい」

「そっですな」

「おおー！」

というわけで、俺ら一同は『青春』を求めて街に繰り出す事にしたのである。・・・なんのこっちゃだ。

とりあえず食堂を出ることにした。校庭を抜けて正門へと向かう。やはり周りからの注目度が高い気がする。なんとも居心地が悪い気分になるが、これほど注目されるっていうことはやはり彼らの能力は桁違いということなのだろう。

「そつえば、皆の能力つて実際どれくらいのレベルなの？俺そこから辺の基準自体がまだよくわかんないんだけど」

歩きながらこの学園での異能の基準を皆から教えてもらおう。大まかには科学的、軍事的、文化的に『どれだけ価値』があるのかという基準でランク分けされるらしい。ランク1からランク5まであるようだ。

「おおざっぱに言えば『国が手放したくないレベル』によってランクが決められるよん」

ランク1：疑わしい者・力はあるが影響力無し

自称であったり、科学的な根拠はあるものの、人々に対してあまり影響が無い部類。お寺の住職、気功師、牧場主や農夫、ギャングラーなどには比較的ランク1の人物が多いらしい。霊や動物の声が聞こえる。運気の流れを読む。体の悪い部分分かる。昔は迷信や信仰の対象であった不確かな物に科学が追いついたため立証することはできたが、まあこれくらいのランクの人はわりとどこにでもいるらしい。学園もこのランクを保護をしない。

ランク2：力を証明する事ができ、対一人に影響力を持つ者

科学的に力を認められた者がこのランク。気功を放つ者や、催眠術を公使できる者、50m以下の対象物を瞬間移動できる者などがこのランク。このランクからは確実に特殊な人間として認識される。しかし国としてもこの程度の能力は対して利用価値は無く、周りにちよつと思議な事ができる人程度の認識にしなければならない。ちなみに知識や技術として催眠術を行使する人は、そもそも異能ではないのでランク付けすらされることは無い。

ランク3：目に見える力として体现することができ、国にとって価値のある者、数十名程度に影響力があるもの

このランクから国として利用価値が発生する。新興宗教の教祖、異常な反射神経や記憶力を持つ者などがこれに当てはまる。現代科学にてこのランクの者はほとんどが解明済みである。学園の保護対象となる。

ランク4：ランク3よりも強力な力を持つ者。国外への移動に制限が付く。数百名に影響力があるもの。

国にとって手放しがたい存在。彼らは人々へ忖にも無く自分の影響下に強いてしまう。行動は制限され、常に監視されている。科学的な価値も高い。ちなみに日本には30名程度がこのランクに属しているらしい。

ランク5：国がお願いして他国へ行かないでくださいとお願いするレベル

なんとという中二病。現在の科学では到達できない地点にいる人達。国からの積極的な支援を受けることができ、その貢献度によっては将来も完全に保証される。もちろんその存在は極秘中の極秘であるはずだが、本人達はまるで気にせず自由奔放に生活しているせいでバレバレである。ランク5とランク4には具体的な能力の差は実際あまり無いので基本的な制限はランク4と同等である。しかしその

科学的価値は未知数であり、もはや畏怖の対象にすらなっている。

「ちなみに、ランク4からは体のどこかに必ずチップを埋め込む事になっている。俺らは皆ランク5だな。まあ科学的にまだまだ研究が進んでいないらしいな」

彼らは人の範疇を完全に超えているため、自分自身での能力の制御ができなくなることがあるらしい。国からのバックアップが無ければ志貴崎さんなどはすぐ体がボロボロになってしまうようだ。異能者達も色々大変である。

「私なんて科学者お手上げ状態だもんねー」

へっへーんと山城さんが得意げに胸を張る。確かに彼女の能力なんてまともに科学で説明しようとするのがバカらしくなりそうだ。頭を抱える科学者が容易に想像が付く。

「持ちつ持たれつと言う所だな」

「なるほどなー」

改めて彼らの規格外を再確認した。そして俺の姉もランク5という事なのだろう。今まで必死に否定してきたが、帰ってきたらあの人の非常識ぶりも改めて見直す必要があるわけだ。

そここうしているうちに校門を抜けた。10分ほど歩けばこの都市の中心街へと着くことだろう。

一話 友好を深めよう？（前書き）

読みやすい文体を探っています。

二話 友好を深めよう？

「さて、街に繰り出してきたわけだがっ」

ここまで来るのに軽く二時間程度かかった。いやもつとか？本当は10分程度の距離にこの時間だ。この人達は気が多すぎる。その一例を挙げよう

志貴崎さんは、すぐに道に店を出してる食べ物屋に顔を出して、かならず一つは購入して食べる。

「俺はすぐ腹が減るからな。」

「一日5回くらい歯磨かないとすぐ虫歯になっちゃいそいだねー」

「・・・ガム」

「お、すまん」

淡々と答えられても困ります。次は餃子ですか。キシリトールガムと餃子はさすがに『無い』と思います。

「右で餃子を食べながら、左でガムを食べる。次は逆だ。俺の必殺技だ」

「・・・ええええー」「・・・」

だれをどう必殺するんだよ。どん引きだよ。

「ちなみに虫歯は一つもないぞ。見る。この白い歯を」

「・・・うわぁ・・・」「・・・」

なんかもう志貴崎さんの立ち位置が決まりつつあるなぁ。と思う

一幕だった。

鬼谷さんと山城さんは、ゴスロリ系のファッションブランド店を見つけたと思っただら野谷さんをずるずる引っ張り込んでファッションショー始めちゃうし。

「……ごわごわする」

「ごういう服あるんだねー」

「ちよつと恥ずかしいですね」

そう言いつつも抵抗せずに来ちゃう野谷さんも、やはりかわいい服には興味があると言っことか。

赤と黒を基調にして、全体的にシックにまとめてある。ポピュラーな系統として愛されているゴシックパンクというジャンルである。左右の靴下の柄を変えてフリルは抑えめ、若干短めなスカートから覗くふとももの上を這うガーターベルトがなんとも扇状的だ。レースをあしらったフリルはよく見ると手縫いだ。職人芸が光るね。

山城さんはこれまたポピュラーなアリスインワンダーランドに登場するアリス風。針金で補強していないスカートはすとんと落ちてしまうが、体の動きに合わせて踊る水色のスカートは健康的で元気なアリスのイメージにぴったりだ。ツインテールを下ろして流したストレートの髪が綺麗なアクセントになっている。スカートから覗く白い靴下にもどきつとする。ただ、そこはゴシックブランド。エプロンには血糊がつき、山城さんの手には首のもげた縫いぐるみが抱かれている。

ある意味一番似合っているのが鬼谷さんだ。漆黒を基本にした通称黒口リ。典型的なゴシックドレスを包むレースやフリル全てが黒。そしてそれを纏う鬼谷さんの鮮やかな銀髪は凄惨な存在感を放ちながらも美しさを破綻させない。そもそも黒口リとは、ゴシックロリータ旋風を巻き起こした2000年代に派生した亜流である。そもそ

もゴシック文化、もしくはゴシックパンクから短を発するこのファッションの歴史にと以下略。

なんとも良いものを見させていただきました。

「ふむ。動きづらそうだな。それに暑そうだ」

「だから冷房ガンガンなのか」

「二人も着てみたら？ 圭は化粧すればギリギリいけそー」

山城さんが意地の悪い笑みを浮かべている。

「男性用にリサイズした物もありますよ」

店員さんも反応しないでくれ。

「い、いやあ遠慮しておきます」

「ほほう。これを着る男もいるのか。面白いな」

フリルがたくさんの大きめなカチューシャに手を伸ばした志貴崎さんを必死に止めた。この人もしかしたら面白そうな事に基本惹かれるのかもしれない。

その後も二着ほど洋服を着て遊ぶのをのんびり眺めてようやく店を出た。野谷さんと山城さんは数着買ったようでご機嫌である。荷物になるのでとりあえず店に置いて貰い帰りに受け取って帰るようだ。なんか目玉が飛び出るような金額がディスプレイに表示された気がするが俺は何も見なかった事にした。

その後も買い食いする志貴崎さんに、かわいい物を見ると飛びつく山城さんと鬼谷さんに、ふらふらと突然いなくなる野谷さんと、一向に俺たちは目的地にたどり着けない状態が続いた。

「子供かつ！いや子供だけれど！何か見つけて行きたいときは俺に教えること！」

「はいお母さん」

「わかったお母さん」

「わかりました」

「・・・わかった」

「誰がお母さんだ！」

基本的に自由に今まで生きてきたのだろう、集団行動が苦手なのかもしれない。

っと、服をちよいちよ引っ張られた。見ると野谷さんが俺を見上げていた。

「・・・ちよっと、・・・あそこで見たい物が」

野谷さんの指差す先にあるのは一件のPCショップだった。

「卯月つてばPC好きだよなー。自分で組んでるんでしょ？」

「・・・ん」

どうやら自分で組み立てる人が利用する店らしい。俺のPCは5年前くらいのメーカー品だからこういう店には入った事がない。野谷さんに続いて入る。

ちよっとだけワクワクしながら入ると、まさにカオスという他無い空間が広がっていた。人が通るのもやっとの通路に所狭しと色々なパーツが飾られている。ファンだけでこんなに種類あるのかよ。何か光ってるのあるし。PCの中に入れるんだろ？これ。なんで光る必要がある？

「……透明な外見……だと……中も見えるから」

「なるほどな。しかしこれだけ光つてると目につるさそうだな」

「……私はあまり……好きじゃない」

野谷さんは勝手知ったるといふ感じで、すいすい奥に入っていく。圧倒的物量に圧倒されつつも、俺も適当に物色する。他の皆も色々見て回っているようだ。俺はこ自作こらへんの知識がまったく無いので、自然とゲームソフトコーナーへ。

昔からPCソフトやメディアはダウンロード販売が主流になっているが、いまだにこういった現物での販売は一定の支持があるようだ。最近はどうもその市場も縮小してきているみたいだが。

量子通信が確立されて久しい昨今、インフラもある程度整い世界中でゲームにとって一番の問題であったタイムラグ問題は解消された。そしてなんとと言ってもVR技術の確立。破竹の勢いで普及したVR環境により、オンライン通信を前提としたゲームが現在の主流となり、こうして俺が眺めているソフトも大抵が多人数でのプレイが基本のゲームばかりだ。

「スターダストオンラインって懐かしいな。もう10年以上になるんじゃないか？」

小学生のころにやっていたVRMMORPGのパッケージを手にする。あの頃で既に5年目とかいってた気がする。大型パッチを定期的に適応する事により物語性を持たせたタイトルで、太陽が異常に近い惑星を舞台に剣と魔法を使って冒険するSF色がちょっとあるファンタジーであった。『太陽による惑星の死が咲きか、それを止める手立てを発見するのが先か、その未来を決めるのは君だ!!』とかってチープなうたい文句だったような。

「懐かしいなあ。これまだやってるのか」

中学受験をするためにこのゲームは引退した。まあ大型アップデートのたびに細かいパッケージを買いなおさなくてはいかず、俺のお小遣いだとしても続ける事ができなかつた。ゲーム内で友達と小さな送別会をした記憶がある。

スターダストオンライン - スターターパック -

あの世界中1000万人がプレイしているSDOの超お得パックが登場！！

永遠に無料宣言！基本料金無料！！

今までのアップデートタイトルが全て込み込みですぐ遊べる！！

低スペックPCでも快適プレイ！

今からでも遅くない！経験値ブーストなんと三倍！！

最初の旅を協力サポート！太陽神の剣、太陽神の盾、女神のくじ引きをプレゼント！！

超かわいい！！アバター装飾バランゴの花をプレゼント！

マグポイント300P付！

ゲーム内職のリーストプリフィギュ付！

「うわあ」

！多すぎだとか、プレゼント沢山ありすぎだとか、まずマグポイントって何だよとか、ゲームパックなのにフィギュアが付いてくる意味不明さだとか、色々あるが顧客獲得のための必死さが伝わってくる物凄いパッケージデザインになっている。情報量多すぎだ。

「なにになに？なにみてるのー？」

「ん。いやこのゲーム小学校の頃やってたんだが、まだやってるんだなあって思ってた」

「何か凄い色々ついてるねえ、1980円って値段が安いのか高いのかよくわからないけど。あ、この人形かわいい」

「運営の必死さが透けて見えるだろ？」

山城さんも食いついてきた。背表紙を見たり、裏返してみたり、パッケージ所狭しと踊る文言を見て「バランゴの花ってなにさ」なんてぶつぶつぶつぶやいてる。

「・・・そのゲームは先月終了した」

「お、野谷さん。もういいのか？」

「・・・ん。・・・値段。確認だけだったから」

野谷さんの説明によると、数多くの大型アップデートによるイベント等人気はあったものの、ゲームについていけない人が続出。また、度重なるアップデートによって増えたスキル、種族、アイテム類の調整が甘く、方向修正が出来ない状態になりゲーム内バランスが崩壊。他のゲームへの流出を防ぐ事が結局できずに、先月ひっそりと、その13年という長いゲームの歴史の幕を閉じたらしい。

良く見るとこのパッケージほこりをかぶってるな。いつの物なんだこれ。

「卯月ー。卯月はどのゲームやってるのー？」

「・・・これ」

野谷さんが差し出したパッケージを見る。

「『ハローポイント』、FPSか？」

「・・・ん」

パッケージには『HALLO POINT』とだけ書かれた文字に兵士が一人。現代の装備じゃなく、200年前くらいの市街地戦闘員の装備のようだ。

21世紀程度の当時の軍事装備を基準にした、5：5に分かれて銃撃戦を繰り広げる少人数市街地戦闘物らしい。リアル志向で難易度が高いタイプのジャンルのようだ。軍部隊とテロリスト部隊に分かれて、テロリストは爆発物をしかけ、軍はそれを解除して競うゲームと教えてくれた。

「俺はこの手の硬派なのはやったことないな」

「・・・面白い」

俺もFPSをプレイした事があるが、結構いい加減に銃を撃つても相手に当たってくれたり、いろんな行動にシステム側がアシストしてくれたりする感じだった。飛行機で飛んだりミサイルを落としたり。わりかし馬鹿騒ぎという言葉がぴったりなゲームだった。野谷さんによると「お祭り系」というらしい。

「そうか。今度教えてくれ」

「・・・ん」

自分の好きなゲームに興味をもたれてうれしいらしい。少し頬を染めてうつむく野谷さんは相変わらずなでなででしたいです。

値段は6900円か。ちょっと高いけれど、まあ何かのゲームと一緒にプレイするのも楽しそうだし、買う事にするか。

「どうせなら皆でやればいいじゃーん。けーちゃん携帯だしてー」

隣からパッケージを覗き込んでた山城さんは、ポケットから携帯

を取り出して何か操作をしている。というか『けーちゃん』って俺か。慌てて俺も携帯を取り出すと、山城さんに携帯を奪われた。そのまま俺の携帯と自分の携帯を操作する山城さん。

「はい」

渡された俺の携帯のタスクには「HALLO POINT PC PACKAGE 0.2%」と表示が出ていた。詳細情報を見ると山城さんからのプレゼントとなっている。これでダウンロードが完了してPCへデータを転送するとゲームが遊べる事になる。

「わ、悪いってこんなの」

「いいっていいってー」

「いや、女の子におごってもらって普通ちがくね？」

「この位おごった内に入らないよー」

のほほんと返してくる山城さんだが、どう考えても奢った内に入る値段だと俺は思ったので、やっぱりお金は俺が出したい所だ。とつさに財布を出そうとすると山城さんの機嫌が悪くなる。

「もー。女の子が奢ったんだから女の子立てなさい！」

「いや、逆だと思っただが」

お互い譲らず平行線にしかならないので、山城さんが「じゃあ今度私の用意する洋服着てくれればそれでいいよ！」と譲歩策を提示してきた。俺はありがたくそれに乗る事となった。どんな服が用意されるのか、想像するだけで恐ろしいので考えないようにした。

とりあえず野谷さんの用事も終わったことだし外に出る。と、入り口で志貴崎さんと鬼谷さんが待っていた。志貴崎さんは、店舗前

で広げられている商品を物色しているようだ。

「もういいのですか？」

「……ん」

「おお、終わったか。見る。このメガネ凄いで。相手の戦闘力が見れるのだ！」

興奮気味の志貴崎さんは赤みのかかったメガネをつけていた。商品棚のポップを見る。『戦闘力測量機。これで相手の強さをチエツクナウ！』と書かれており、隅にえらく髪のとがったにーちゃんがメガネをつけてどや顔してるイラストが添えられている。パーティーグッズのようだ。

「戦闘力5か……」

ハン、と言った感じで志貴崎さんにどや顔された。ちょっとムカつく。

「な、戦闘力4000だと……！！な、……まだ上がっているだど……！！」

向かいのハンバーガーファースト店の、軒先に置かれた人形に向かって志貴崎さんが狼狽している。

「……チーズバーガーを買ってきていいか？」

「そのメガネを戻してからならな」

いそいそとメガネを棚に戻し、小走りで志貴崎さんは店の中に入っていた。少し経って店から出てきた志貴崎さんの両手には、それぞれチーズバーガーとダブルチーズバーガーが握られていた。

「両方ダブルチーズバーガーでいいじゃん」

呆れ顔の山城さんを見て、何を勘違いしたのか「何だ？食いたいのか？」と志貴崎さんは食べかけのハンバーガーを彼女に差し出した。

数分後、女王様モード役になった山城さんに、志貴崎さんは地面にへばったのは言うまでもない。

……というわけで、たった10分の道のあるだけでこの人達は色々と自由奔放さを発揮したのである。まあ、楽しかったから良いんだけどね。なんだかんだでさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7712y/>

彼らの遅すぎる青春

2011年11月25日20時48分発行